TACパワーアップ大会2013を開催!!

今年で6回目となるTACパワーアップ大会。「JAの総合力を発揮した担い手への事業提案と担い手の経営改善」をテーマに熱気あふれる会となりました。

大会宣言

一、担い手と一緒に、地域の農業を元気にします。
一、担い手と一緒に、より良いJAグループを創ります。
一、担い手と一緒に、地域の食と農を発信します。

JA全農は、11月28、29の両日、「TACパワーアップ大会2013」を神奈川県横浜市の新横浜プリンスホテルで開催しました。地域農業の担い手に出向くJA担当者【愛称＝TAC（タック）】を対象とした6回目の全国大会で、474人が参加しました。担い手と向き合い、農業振興に取り組む全国の事例を共有することで、TACの活動のさらなる深化を目指すのが狙いです。28日は、JA・TAC表彰式、受賞JAによる事例発表が行われました。29日は、受賞TACによる事例発表、分科会が行われました。

開会あいさつでは、JA全農の中野吉實経営管理委員会会長が、「TACの活動は年々レベルアップしている」と語り、実需者への販売提案や、担い手への生産提案など、地道な活動の成果を称えました。また、TACの活動を核にしながら、JAの役職員一体となってJAグループの総合力を発揮することが、JA全国大会で決議した「地域農業戦略の実践」にほかならず、TACの活動をさらに支援し、担い手への対応を強化すると述べました。

来賓あいさつでは、農林水産省、農林水産技術会議の雨宮宏司事務局長が、生産現場の強化のための農地集積、日本食の世界遺産指定、バリューチェーンの再構築など「攻めの農林水産業」に触れた「万一、低コスト化や金融提案などを含め「新しいことに取り組む、意欲ある担い手へバックアップを」とTACの活動への期待を語りました。

また、コープネット事業連合の赤松光代表理事理事長は、年配者の簡単調理への要望や若年層の低価格化志向など、現在の食の現状を紹介し、TACに対しては、「消費者が何を望んでいるか」を探り生産者につなぐことで、食と農の懸け橋となってほしい」と語りました。さらに、生協との積極的な連携も働きかけました。

基調講演では、小説家の山本一力氏が「生き方雑記帖」と題し、食にまつわる自身の思いを語りました。旅行会社に勤務していた30年以上前、添乗員として生産者とともに海外へ初渡航したときのことを振り返り、「行きの飛行機の中で、農家のおばちゃんたちが持ってきたおにぎりの味が忘れられない」と話しました。食べ物を大事にすることは、教育の第一歩であると強調したうえで、「日本の食文化を皆さんで守ってください」とTACにエールを贈りました。

JA全農の中澤彰彦常農販売企画部長は、昨年度のTACの訪問担い手数が11万件を超えたことを報告。今後は、農業法人への対応強化も目指すと語りました。また、生産と販売のマッチング提案の成果も紹介しながら、今後は関連部署とのさらなる連携を呼びかけました。最後は「ともに日本の農業の未来を描いていきましょう」と力強く締めくくりました。

日本の食文化を守れ」とTACを激励した小説家　山本一力氏

食と農の豊かな恵みを積極的に連携を働きかけたJA全農　中野吉實会長

意欲ある生産者への支援をとりかけた農林水産省　農林水産技術会議　雨宮宏司事務局長

地域農業戦略の実践を語ったJA全農　中野吉實会長

交流会のあいさつでは、JA全農の神出元一代表理事専務が、キリンとの震災復興プロジェクトの紹介や、TACの活動がJAや担い手から大変喜ばれている事例を語り、TACの活動を引き立てました。

全農会長賞を受けるJAきみつの齋藤茂雄代表理事組合長

大会宣言をするJA島原雲仙の山崎可織氏

事例発表をするJAきみつの田丸猛志営農課長

全国のTACをはじめ、474人が一堂に会した今大会

JA表彰

担い手への提案内容とその成果、TACの活動を通じたJAの事業効果で審査

島根県	斐川町農業協同組合	日常の訪問活動や事業運営に係る実態調査から、担い手の多くが経営管理に不安を抱えていることに注目。TACは「担い手への経営支援」を最重要課題と位置づけ、JAとして部門間連携をはかりながら、業務にあたる。経営分析、基盤強化準備金の周知、農業簿記支援を実施し、それぞれの担い手に理解してもらいやすい形で分析結果と善後策を提案し、農業経営の総合的な支援を行った。結果として、担い手の意識も大きく変化した。 全国的にJA出資型の法人が増加している中で先駆的な事例となっている。 集落営農の法人化支援、法人化後の運営支援にも善手しており、土地利用集積や、JA出資金制度の有効活用を実現させ、管内36組織の当期純利益が前年比110%となった。10年後を見据え、JAとして積極的に法人経営を支援していく姿勢を見せ、信頼関係をさらに深めた。
静岡県	とびあ浜松農業協同組合	150以上の共販品目がある中で、生産者の所得向上を目的とし、TACが品目ごとの課題を抽出して1年を通じて課題解決する「1品目1課題実践運動」を展開。担い手の経営向上にも寄与し、産地振興をはかっている。 また、金融部門と連携し、担い手を資金面でもサポートしている。TACが担当する全ての担い手に対し、将来の夢や希望について経営意向調査を行い、24年度は473軒からのべ625件の情報を収集した。調査によって伺らかの意向があった担い手に、TACと融資担当者が同行訪問を実施。JA本来の使命である担い手の夢の実現に向けて、JAの総合力を発揮している。 この取り組みを行なった平成23年度と24年度の農業制度資金の取扱実績は、取り組み前の平成16～22年度平均と比べると、件数で1.77倍(平成23年度)、金額で1.93倍(平成24年度)伸びている。
千葉県	君津市農業協同組合	「JAは組合員に何をしてくれるか」という担い手からの問い かけを発端に、農業振興計画の策定に着手。担い手の意向調査なども踏まえた上でTACを中心に進め、「課題」や「実施方法・時期」「到達目標数値」を見える化した結果、JAに対する組合員の信頼感が急速に高まった。 きみつ野菜の生産振興も狙い、JAの育苗センターでの育苗受託を行うなど、既存品目の拡大、新規品目の導入を促進。また、房総半島特産の食用ナバナは、畝立て作業を受託するなど、労力軽減につとめ、産地維持に貢献した。 新規就農者、後継者の育成・定着も支援。JAきみつ独自の「新規就農者への育英資金供与・助成措置」を設けた。新規就農者と、JA理事・役職員・関係機関・先輩農業者との情報交換会も開催、連帯意識が生まれ、JAとの距離が近づいた。

全農会長賞

JA特別表彰

米集荷促進のための施策・提案とその成果、出荷契約実績で審査

島根県	いずも農業協同組合	気象温暖化の影響で、主力品目であるコシヒカリの一等米比率が低下。等級格差により手取りも減少した。そこでTACは、温暖化対策品種である「きぬむすめ」「つや姫」の栽培提案・栽培指導を通じて、高品質米生産の活動を支援した。 またGAPの取り組みも強化し、消費者に向けて、農業者の農作物の安全・安心に対する意識も高めた。同時に、永続的な農業経営が実現するよう、肥料農薬講習や農作業安全講習を開催し、農業者自身の安全対策にも注力している。 米集荷決起集会の開催や営農部署とも連携した訪問活動も展開。 JAと担い手が一体となった米づくりを目指した結果、担い手の契約 数量は向上（前年度比103.2%）。担い手からは「JAが一生懸命米を集荷し販売してくれる」と高い評価を得ている。
滋賀県	グリーン近江農業協同組合	担い手から、「他業者よりも高く買い取ってもらいたい」「大規模経営をしてもしなくてもJAの対応が変わらず不満だ」などの意見・要望が出されていた。 そこで、TACは担い手に対して、消費者に求められる「環境こだわり米」づくりを提案。価格よりも高品質な米の生産振興を目指した。平成25年度の実績2746ha、JAへの米の集荷率はほぼ100%（24年度実績）となった。 集落型法人組織の育成にも力を注いだ。担い手を数十回も訪問し、法人化にかかる課題解決や集落の合意形成を支援した。法人化にあたり、JAから出資を行い、JAグリーン近江出資法人連絡協議会（45法人が加入、TACが事務局を担当）を設置。結果、JAへの米出荷が安定的になった。 また、担い手の直売米に対する支援も実施。場所貸し、検査、直売向け米袋の販売、直売所でのコーナー設置（一部）等、柔軟な対応を行っている。
熊本県	八代地域農業協同組合	JAから脱退したトマト栽培の担い手に対して、TACが中心となって、関係部署・機関と連携しながら、再加入のアプローチをはかった。度重なる訪問の結果、経営相談をもちかけられるほどの信頼関係を築くことができた。JA事業（共販出荷）への利用向上につながっている。後継者のいる担い手に対しては、後継者同士の情報交換や技術交流のため、JA青壮年部や利用組合青年部などの加入提案も行った。 イチゴ農家に対する、栽培技術指導・イチゴ管理の実践、トマト・メロン農家に対する連作障害軽減の土づくりの実践で、それぞれ成果を上げている。 TACの活動の「見える化」にも着手。訪問結果を数値化し、担い手の経営状況を適切に把握できるようになった。資材購入キャンペーンや農業関係融資の説明会、法人対応など、各部署と情報共有することで、JAの総合力を存分に発揮している。
愛媛県	越智今治農業協同組合	果樹農家の高齢化による労力不足を解決するため、JA職員10人体制の農作業支援部隊「心耕隊」を結成。TACが担い手の要望を聞き、「心耕隊」の事業推進・営業活動を行っている。担い手からも好評で、地域農業の起爆剤として期待が高まっている。 おちいまばりブランドの確立に向けた取り組みにも注力。「はれひめ（瀬戸の晴れ姫）」では積極的な生産技術の推進や企画販売、加工品の開発、「甘長とうがらし（甘とう美人）」では、市場外出荷にも積極的に着手し、規格外品の販売も行っている。そのほか、樹園地の巻き上げマルチ設置による労力軽減、土壌改良材の船取り手約による コスト低減なども実現している。 「担い手の「困った」を集め、解決すること」を合言葉に、営農支援だけにとられず、担い手を多方面から支援することを目指している。

参加者による分科会

TAC管理者

今回で6回目の大会ですが、TAC管理者・TACに分かれての分科会は初めての企画でした。県域・ブロック域のTAC管理者・TAC同士の交流はこれまでもありましたが、今回はそれを越えた全国のメンバーとの意見交換を行うことで、今後の活動のスクきやきっかけにつながるよう実施しました。

マネジメント能力向上をテーマにし、効果的なチーム運営の要素について、TAC管理者同士が意見交換をすることにより、自らのチーム運営の課題を認識し、改善策を見出すことを目的に実施しました。

分科会のゴールをチーム運営の重要な要素について、自分なりの考えを述べることができる」、「TAC管理者間の意見交換により、自分のチームの課題を認識することができる」、「明日から新しい行動に取り組もうという意思を持つことができる」ことなどを目的として、同士が積極的にゲームや意見交換を行い、新しい知見を得ました。

参加者からの声

■組織のビジョンや理念をTAC管理者・TACが共有した上で、明確（具体的）な活動目的、行動計画等が必要。
■明確な行動計画（手順）の整理と役割分担等を行い、その進捗（プロセス）をTAC管理者としてしっかり見ていかなければならない。
■TACの得意分野・能力等を把握するために、TACとのコミュニケーションを良くすることが重要であり、TACとの関係を向上させることがTAC管理者としての資質向上にもつながる。

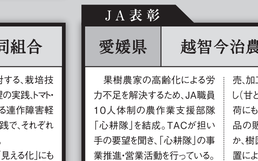
TAC

生活形態の変化による食生活の課題を考え、JA・地域の資源を活用した企画作成を目的に実施しました。「地域生産振興」は、全国的にも大きな課題となっています。TACとして担い手の生産面・技術面のニーズ対応はもちろんですが、農産物を実際に購入し食べてくれる生活者を意識することも重要な要素となるため、各グループで特定のターゲット（※）に対する企画を完成させました。

※特定のターゲット
①「共働き家族」（幼児から小学生までの子どもがいる家族）
②「お二人さん」（団塊世代でこどもが独立している夫婦）
③「シングル」（20～39歳までの働く独身男性・女性）
④「青少年」（中学生・高校生）

参加者からの声

■生活者目線の農に関する気持ちを忘れがちだった。
■現在の食生活は昔とたいぶ変わっている。それを少しでも昔に戻すことを考えていかなければならない。そうしないと農産物を生活者が購入していかなくなる。
■生活者の食生活の改善が必要であり、それに対してJAとして、ファーマーズマーケットや青年部・女性部と連携したイベント、出荷規格外品等の利活用等、地域生活者に対しての接点づくりを積極的に行なっていくべき。
■生活者との接点を継続的に持ち続けていくことは、JAとして必要であり、今後を考える良い機会となった。



TAC パワーアップ大会 初の取り組み

今大会は、TACのさらなるパワーアップを図ろうと、2つの新たな企画を展開しました。

1 ブースでの情報提供！

全農本所の事業部門と連携して、「省力・低コストなどの栽培技術・資材」「生産・販売マッチング」などに関するポスターを展示しました。TACから担い手への情報提供や提案につながるバックアップを行いました。

2 交流会での特産品紹介！

交流会でJAの農産物・加工品を紹介することで、全国のTACで展開する「Agrifuture」「みのりみのるマルシェ」の取り組みの周知を行いました。

TACパワーアップ大会 表彰

TAC（タック）とは、「地域農業の担い手に出向くJA担当者」の全国統一愛称です。

TACの役割

①地域農業の担い手に訪問してご意見・ご要望をうかがい、誠実にお応えします。 ②地域農業の担い手の経営に役立つ各種情報をお届けします。 ③地域農業の担い手のご意見を持ち帰り、JAグループの業務改善につなげます。

TACの由来

Team for Agricultural Coordination
JAグループが一体となって地域農業をコーディネートします。

TAC新人表彰 受賞者（取組事例要旨）

TACに表彰は活動経験1年以上、TAC新人表彰は活動経験1年未満のTACに贈られます。

長崎県　島原雲仙農業協同組合
営農部　担い手対策課
山崎　可織 氏

取り組み内容
担い手ニーズに応えた生産資材のコストダウン提案

担い手から「JAの資材は高い」という意見に対応するため、関係部署と連携し、担い手の規模にあわせた奨励金制度をシミュレーション化した。提案時期を見定めたうえで、土壌分析結果とあわせたコスト低減効果を示すことで、担い手から高い評価を得ることができた。

京都府　京都農業協同組合
営農部　南丹広域営農センター
中西祐美子 氏

取り組み内容
小菊の生産拡大

京都府推奨品目である小菊の生産拡大を狙うが、面積あたりの出荷本数が少ないなどの課題に直面。そこで、仕立て本数・出荷規格の変更の提案や、最需要期に適した新品種導入の試験を行った。結果、出荷本数・販売金額ともに増加。担い手からも作業労力の軽減と出荷の歩留まりの増加を高く評価された。

福岡県　にじ農業協同組合
営農部　作物振興課
江藤　睦 氏

取り組み内容
新設法人への園芸作物の導入と機械化体系技術の提案

米・小麦・大豆を生産している担い手から、安定的な収益の確保の要望があったため、関係部署や連合会と連携し、新規作物としてホウレンソウの作付と、機械化による省力化（播種作業）を提案した。JAと生協で共同開発した「ほうれん草スープ」を今年7月から販売し、新たな販路の拡大に注力している。

愛媛県　西条市農業協同組合
営農販売部　営農振興課　課長補佐
黒川　直樹 氏

取り組み内容
新たな水田稲作体系確立に向けたサトイモによる担い手所得向上

所得向上と省力化を両立する新しい栽培品目の要望に応えるため、県域での産地化を広げていたサトイモ（「伊予美人」）を提案。先行JAとも連携し、産地の基盤づくりに大きく寄与した。販売面では、消費者動向の分析と担い手へのフィードバック、6次産業化の対応などにも注力し、所得向上に貢献した。

滋賀県　北びわこ農業協同組合
営農経済部　TAC推進課
金田　博 氏

取り組み内容
「北びわこ生産基準米」の提案による農業経営の安定化

米の販売・生産に関して、水稲の担い手から多くの要望が出されていた。そこで、琵琶湖の水環境と消費者に配慮した「北びわこ生産基準米」を提案。卸や生協、大手量販店との契約によって、安定的な販路を確保した。省力技術の普及や、高い水準の概算金の設定など、農業経営の安定化にも寄与した。

静岡県　とびあ浜松農業協同組合
湖北営農センター
中村　香織 氏

取り組み内容
柑橘老木園地の改植を促し、産地の若返りを図る

老木園地の若返りを図る改植で、生産者の高齢化や育成期間となる4年間の未収益が課題だった。管内の若手担い手グループに未収益を短縮する大苗の育成と大苗改植作業の受託を提案。その結果、若手にとっては農閑期の収入増が見込めると同時に、耕作放棄地の解消、新規の園地拡大にもつながった。

新潟県　中条町農業協同組合
営農販売課　係長
大橋　和則 氏

取り組み内容
不作付地の解消と園芸品目拡大への取組

葉タバコを廃作する農家が増加し、不作付地が耕作放棄地になる恐れがあった。不作付地の解消と担い手の所得向上を目的に、園芸作物（生食ニンジン・加工ニンジン・加工トマト・カボチャ・かんしょなど）の推進をはかる。加工ニンジン・加工トマトはカゴメと契約栽培。結果、廃作予定地の95.6%に作付けすることができた。

宮城県　あさひな農業協同組合
営農販売部　生産資材課
関根　学 氏

取り組み内容
連作障害の解消と農閑期の労働力の活用のため、関係部署と検討し、仙台の伝統野菜「曲がりねぎ」の作付・市場との契約販売を提案。その結果、収入源の確保も望めるようになった。面積拡大や、JA事業への貢献も期待できる。試食宣伝にも注力するなど、生販マッチングの好事例となった。

岩手県　新岩手農業協同組合
営農経済部　監理役
澤口　明浩 氏

取り組み内容
経営規模拡大のための海外実習生受入の提案

「家族労働力だけでは限界がある」という大型野菜農家へ向けて、海外実習生受け入れを提案。各品目の効率的な作業の組み立ての改善により、栽培面積の拡大や時間短縮、収入増が実現された。受け入れ農家の生産意欲も高まるともに、近隣地区の法人などへの波及効果もあった。